慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	尾崎紅葉『侠黒児』試論 : The Grateful Negroとの比較考察を通して
Sub Title	The images of Blacks and Whites in Ozaki Koyo's art
Author	李, 敏永(Lee, Minyoung)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2006
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.90, (2006. 6) ,p.97(172)- 119(150)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00900001-0119

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

尾崎紅葉『侠黒児』試論

― *The Grateful Negro* との比較考察を通して―

李　敏永

1 序論

尾崎紅葉の『侠黒児』（明治 26 年 6 月）は、博文館の叢書「少年文学第拾九編」として発行された書物である。

鄭澳生が「翻訳流行」（『早稲田文学』　明治 26 年（1893）8 月）の中で「紅葉がものせしエッジヲルスの『侠黒児』あり」と書き記しており、すでに同時代において西洋文学から享受されたことが明確にされている。この「エッジヲルス」の書物とはイギリスの女性作家 Maria Edgeworth の *The Grateful Negro*（1802）のことである。本稿では、『侠黒児』と *The Grateful Negro* との比較考察を通して、尾崎紅葉における西洋文学受容の一側面を考察していくことにする。

『侠黒児』について博文館は「幼年雑誌」の紙面を通して以下のような広告を出している。

> 紅葉山人が筆以て一人の侠気ある黒奴の事を陳べたるものにして、遂に此侠黒児は恩人の身代りに死して、虎の如く獅子の如く怒れる数百人の他の黒奴の暴動を静づめるといふ、いかにも悲壮の物語也
>
> （『幼年雑誌』第 3 巻　14 号　明治 26 年（1893）7 月 15 日）

紙に落ちたるは、著者が美文。筆に染みたるは、黒奴の熱涙、明月

光冷かにして芭蕉の蔭自から暗く、獰鬼の咳き且つ舞ふの時、咽々海風に和して起る、西印度ジャメイカ島黒奴が不平の叫び、不倶戴天の白人種渠等が肉を膾にして、髑髏の盃に飲まむといふ。唯此間至誠主恩を忘れざる一個の俠黒児あり。義膽鐵腸、死を見る天の如く、我生命を捧げて黒奴が不平暴動の犠牲となる、熱血熱涙の好物語

（『幼年雑誌』第 3 巻　15 号　明治 26 年（1893）8 月 1 日）

「主恩を忘れざる一個の俠黒児」が「西印度ジャメイカ島」の「黒奴」の「不平暴動の犠牲となる」梗概を、「悲壮の物語」「熱血熱涙の好物語」として宣伝しているように、出版社側は「黒奴」と「白人種」といった人種間の葛藤を物語る作品として読み手に知らせようとしている。こうした人種紛争の物語としての『俠黒児』は、登場人物の名前であれ、ストーリーの展開であれ、基本的には原作の面影をそのまま残していたといってよいものである。

神田麻希子が「アフリカ―伝統と近代化―」（『ポストコロニアル文学の現在』晃洋書房　2004.6）の中で、「黒人」をめぐる「記述には書き手の属する社会の規範が反映されて」おり、「完全に中立な記述など成立しない」と述べているように、原作と翻案という関係において、「黒奴」の「暴動」を材料にした二つの作品を記述する文学主体がイギリスの女性と日本の男性という異なる性と国籍の持ち主であることは極めて興味深い。ここでは、西印度ジャマイカ島の「黒人」の反乱という素材が、相異なる文学主体によってそれぞれどのように描き出され、彼等をめぐる歴史的社会的状況とどのように絡み合いながら物語化されていたのかについて検討していきたい。

まず、二つの作品の冒頭と末尾の記述の在処から見ておくことにする。

「In the island of Jamaica there lived two planters, whose methods of managing their slaves were as different as possible.」と始まる原作の冒頭が『俠黒児』では「西印度じゃめいか島に殖民せる、じふえりい、えどうあゝどなる二人

の英人ありけり。」とあり、『侠黒児』は英文の翻案というより、むしろ翻訳に近接しているかのように見える。しかし、こうした類似性がそれぞれの末尾にまで受け継がれているわけではない。

「Our readers, we hope, will think that at least one exception may be made, in favour of *THE GRATEFUL NEGRO*.」と締めくくられている箇所が『侠黒児』では「じふえりい夫婦は命からゝ本国に遁帰りて後は、見る影も無く貧窮して、人其終を知らずとなむ」と書き換えられており、末尾において二つの作品の相違は一目瞭然である。英文の「at least one exception（少なくとも一つの例外）」といった敷衍説明は、おそらく、「高貴なる野蛮人が思想的に重要な意味をもつ人物でありえたのは 1810 年までで、1820 年までには文学上の流行としても実質的に終わりを迎えた。」[1] という歴史的背景に起因したものと見られる。このように 1800 年代のイギリスでは「黒人」をめぐる表象が「高貴なる野蛮人」から「卑怯なる野蛮人」への変容を見せた時期であったことを想定するなら、1802 年に書かれた原作はイギリス社会における「黒人」をめぐる複雑な認識をそのまま投影していたのであり、原作者が投げかけた最後の一行は、この「黒人」の物語をイギリスの読者に「卑怯なる野蛮人」の中の「一つの例外」として理解させた可能性が極めて高いと考えられる。

同一の素材を取り扱ったにも拘らず、異なる終わり方を二人の作家が選択していたことは、彼らの属する社会的環境によって選別された一つの創作行為として評価すべきであり、同時にまたこうした創作行為の背景として「殖民地」制度や「黒人」「英人」をめぐる語りの位相の差異が注目される。

2　「殖民地」「黒奴」

2.1　歴史的コンテクストの輪郭

同時代の奴隷制度をめぐる時代的な葛藤を浮上させている原作の歴史性は、地の文・イギリス人の会話・注釈といったレベルの異なる語りを通して、西印度ジャマイカ島をめぐる植民地の問題を浮き彫りにしていく。地

の文における歴史的記述は数多く配置されているが、その一例として次のような箇所が挙げられる。

> It is common in Jamaica for the slaves to have provision-ground, which they cultivate for their advantage; but it too often happens that, when a good Negro has successfully improved his spot of ground, when he has built himself a house, and begins to enjoy the fruits of his industry, he acquired property is seized upon by the sheriffs officer for the payment of his masters debts; he forcibly separated from his wife and children, dragged to public action, purchased by a stranger, and perhaps sent to terminate his miserable existence in the mines of Mexico;

ここでは西印度ジャマイカ島での「英人」の「黒人」に対する待遇などが詳細に書きこまれており、奴隷制度をめぐる情報を読み手に提供している。また、二人の「英人」の声は次のように再生されている。

> 'Granting it to be physically impossible that the world should exist without rum, sugar, and indigo, why could they not be produced by freemen as well as by slaves? If we hired Negroes for labourers, instead of purchasing them for slaves, do you think they would not work as well as they do now? Does any Negro, under the fear of the overseer, work harder than a Birmingham journeyman, or a Newcastle collier, who toil for themselves and their families?'
>
> 'Of that I don't pretend to judge. All I know is, that the West India planters would be ruined if they had no slaves; and I am a West India planter.'

「黒奴」を働かせることで生産物を獲得し、独占的な事業を通して経済的な利益を得ようとするジェフリィ、これに対して契約制によって彼等の労働力を使いこなすことを主張するエドワードの考え方が対照化されている。奴隷制度をめぐって異なる考え方を持っている西印度ジャマイカ島の

植民地の経営者の声を再現することで、イギリスが直面していた植民地政策や奴隷制度の問題点を明白に言い表している。

当時イギリス領としてのジャマイカ島をめぐる奴隷制度のありようを歴然と示している原作について、*Slavery, Abolition, and Emancipation* は「歴史的コンテクストの詳細な記述による植民地改善小説」[2] として評価しており、1800 年代におけるヨーロッパの帝国主義と奴隷制度の改善への意志が作品の豊富なデータから浮かび上がってくることを明らかにしている。すなわち、創作主体としての原作者は、時代的葛藤と連動しながら物語を語りだすことで、虚構の中にイギリスの植民地としてのジャマイカ島が直面していた現実の問題点を明確に析出していたのである。

また、原作者が 1800 年代におけるイギリスの植民地政策を見据えた二人の「英人」の議論を配置したのは、「支配者・被支配者の境界はつねに支配者側の複雑な心理が刻印されている」[3] ことに起因しているものと見受けられる。

こうした奴隷制度をめぐる社会的眼差しについて、『帝国主義と知識人—イギリスの歴史家たちと西インド—』（田中浩訳、岩波書店　1979.4）の中で、E. ウィリアムズは「十八世紀最後の二十五年間に、独占業者の中でもっとも批難されがちであった人々は、西インド諸島の砂糖園主」であり、「英領西インド諸島の砂糖植民地は、イギリスには損失をもたらした」こと、さらに「奴隷労働は、不経済であり、非能率的で、経費もかさんだ」ことを明らかにしている。また、『帝国』（見市雅俊訳、「経済」、岩波書店、2003.12）の中で、スティーヴン・ハウは「イギリス植民地帝国の損得勘定を計算しようとする現代の試みは、イギリス本国にとっての帝国の経済的価値に関しては相互に異なり、多くの場合、激しい論争の的」になったことを証言している。これらの文献を参照すると、原作では、経済的な側面で 1800 年代後半におけるイギリス人の農園の経営者等への批判や経営の危機といった実際の歴史的状況が、作品の中にそのまま投影されていることが窺える。要するに、原作者は西印度ジャマイカ島をめぐる歴史性を見据えることで物語を展開していく語りの方法を選択していたのである。

2-2　剥離された歴史的コンテクスト

無論、『侠黒児』にも「殖民」「西印度じゃめいか島」「英人」「黒人」「奴隷」「労役」「移住民」などをめぐる言説が配置されており、原作の語りの方法をそのまま継承しているかのように見える。しかし、『侠黒児』における語りは、原作に見られる奴隷制度や植民地制度をめぐる歴史的情報が剥離されたまま展開されていくスタンスをとっている。先述した原作の「英人」の口論の箇所は『侠黒児』では次のように書き換えられている。

> 「いかにも不便でなりませんから、両人のものを私にお譲り下さいまし。
>
> 「不便といへば不便のやうでもございますけれど、此島には毎日のやうにある事ぢやございませんか。これしきの事を一々気にしてゐたら、到底黒人のやうな奴は、役ひこなせる訳のものぢゃございません。然し、切角さういふ思召でございますれば、私も是非貴下へお譲り申したうございます。万事はぢゆうらんどが心得てをりますから、彼へ御相談下さいまし。

原作では「英人」の言説の配置によって帝国主義の拡大による植民地制度や奴隷制度の問題の真相を垣間見ることが可能であったが、ここではこれらの要素が完全に剥離され、「黒人」の譲渡をめぐる「英人」の個人的な見解や彼等の性格が相対化される。

この点について、土佐亨は「尾崎紅葉「侠黒児」とエッジワース「恩がえしをした黒人」」(『解釈』第 17 巻　1971 年 3 月）の中で「原作者は、思想性を意識しつつ、奴隷の蜂起に対しては否定的保守的な姿勢を見せているように思われるし、紅葉は無頓着で非思想的なままに傍観している」と指摘した上で、紅葉の書物を「原作が微温的に含んでいた種々の問題性に目を閉じ、江戸市民的な侠の美を異国に求めて成立した一種ローマン的な少年読物」と評価している。

また、斉藤愛も「異貌の自画像—尾崎紅葉『侠黒児』と Maria Edgeworth 'The Grateful Negro'」(『比較文学』第 39 巻 1996) の中で「原作の方ではシーザの所有権の譲渡に際して、エドワードとジェフリィの間で奴隷制の是非を巡ってかなりつっこんだ議論が交されている」「明らかに制度そのものへの批判的精神」があるとし、「『侠黒児』では、制度はア・プリオリなものとして容認され、ただその枠内での個人の倫理性の多寡に焦点が当てられていくのである。」という見解を示している。これらを併せ考えると、紅葉が創作の段階で種本の歴史的・文化的背景を排除しようとしたこと、つまり奴隷制度をめぐる歴史的事実と作品との間に距離を置こうとした有様が窺える。

果たして紅葉は当時イギリス植民地に関する情報を得ることは不可能であったのだろうか。作品の舞台となった西印度ジャマイカ島が福沢諭吉『世界国尽』(明治 2 年 (1869)) の「北亜米利加洲」の中で「「中亜米利加」の東方に群(むらが)る嶋「西印度(せいいんど)」「邪麻伊嘉(じゃまいか)は英吉利(いぎりす)領なり」[4] と紹介されたこと、「世界中に散らばる英国植民地の産業、賃金、物価」に関する「在ロンドン日本総領事館が纏めた『英国植民及移住ニ關スル報告』」が「明治二十五 (一八八二) 年」に「外務省移民課から出版され」[5] るなど、イギリスの植民地に関する情報は明治期の日本に報じられていた。

また子供を主な対象とした『幼年雑誌』(博文館) にも植民地の「奴隷」をめぐる言説が、たとえば「奴隷賣買の事は廃せられたれども、また他の名義を以て、此に類する事を行ふ者あり、実に惨酷悖涙の事といふべし、黒人の諸邦、猶ほ奴隷の販売を以て生産とし、或は使役して自から給し、或は之を転売して貿易を行ふ。」(無記名「奴隷の話」『幼年雑誌』第 2 巻 19 号 明治 25 年 (1892) 6 月 1 日)「吾が旅行記の中に、今猶ほ悲哀の記臆を呼び返へすは、西部亞弗利加なるコンゴー国の土人奴隷の惨状なりけり」(世界巡遊者 「奴隷の惨状」『幼年雑誌』第 3 巻 第 20 号 明治 26 年 (1893) 6 月 15 日) と記されるなど、世界各地の「奴隷」の境遇が読者としての「幼年」に紹介されている。ここから推測してみると、明治 20 年代の日本において奴隷制度への社会的関心は決して希薄ではなかっ

たことがわかる。つまり、『侠黒児』が紅葉の手によって書き出される前に、「殖民地」や「黒奴」に関する情報が日本の中で流布されていたのである。したがって紅葉がこうした文献を参照することは可能であったといえる。

このような背景を視野に入れたとき、『侠黒児』の語りに「殖民地」をめぐる歴史的情報が排除されていたのは、創作主体としての紅葉が「黒人」「英人」をめぐる語りにおいて原作との差異を図るためであったと考えられる。

3 「黒人」「英人」

3.1 可視化された「黒人」

【図 1】
The Grateful Negro の挿絵
（*Popular tales* / by Maria Edgeworth ; illustrated by Chris Hammond. London : Macmillan, 1903）

【図 2】
叢書「少年文学第拾九編　侠黒児」の挿絵（博文館　明治 26 年 6 月）

原作と『侠黒児』における「黒人」をめぐる語りには、文字テクストのみならず、挿絵からも歴然たる差異が見出せる。原作の挿絵は【図 1】の

ように、洋服を着ている「黒人」の様子が描き出されており、西洋文明を装っている擬態としての「黒人」としてスケッチされている。こうした挿絵の描出の仕方は、1800 年代のイギリス社会における「黒人」に対する認識の有様を思わせるものである。藤田緑は「高貴なる野蛮人— 18 世紀英国人の黒人観—」[6] の中で 1600 年代から 1800 年代にかけてイギリスにおける「黒人」をめぐる眼差しについて次のように述べている。

> 16、17 世紀での黒人のプレゼンスが貴族や富裕階級といった一部の限定された社会で顕著であったのに対し、18 世紀以降は、黒人がアフリカ大陸からだけでなく、西インド諸島や南北アメリカ大陸からも流入し、英国社会に吸収され、その結果、黒人のいる風景が、もはや日常的なものになったからである。

「黒人のいる風景が、もはや日常的なもの」とされていたことを参考にすれば、1800 年代のイギリスにおける「黒人」は、イギリス人の日常生活の中に溶け込んでいる存在としてその位相を占めていたと考えられる。したがって、原作における「黒人」の挿絵を、イギリス社会に融化している「黒人」の一断面の反映として位置づけてもよいだろう。

一方、『侠黒児』の挿絵は、【図２】のように、原作とは違ってほとんど裸のままであり、人相学的な側面からみても、イギリス人の鼻と「黒人」のそれとは歴然たる差異があるものとして描出されている。こうした人間の鼻をめぐる考え方について坪井秀人は「KNOW THEYSELF? —猫の観相学—」の中で以下のように書き記している。

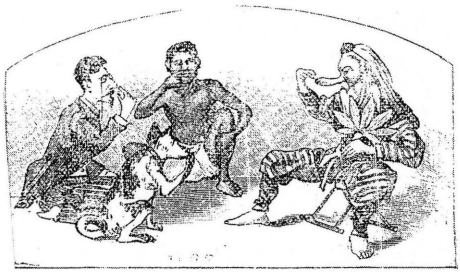
> 先の〈鼻形指数〉による分類が、長鼻＞低鼻という美的階層を作り出し、それにヨーロッパ人種＞黄色人種＞黒人種（＞猿・ゴリラ）という人種的階層を対応させたように、理想的な鼻形としての〈希臘型〉など西欧人一般の〈直鼻〉を標準として、ほかの鼻形はそれからの逸脱と位置づけられる。ここでも理想指数にはるかに劣り〈凹鼻〉の多

い日本人の鼻は西欧人種に対する劣種で醜いと見なされ、隆鼻術の対象にされてしまう。「鼻形は文明度の表徴」なのである。

（『偏見というまなざし—近代日本の完成—』青弓社　2001.4.25）

坪井の指摘を援用すれば、『侠黒児』における「黒人」の描出の仕方を「鼻形は文明度の表徴」の一例としてみなしてよいだろう。つまり、『侠黒児』の挿絵における「黒人」の鼻は「文明」と「野蛮」とを隔てる尺度として例証されていたのである。

しかし、身体性を強調する『侠黒児』の「黒人」の挿絵は、必ずしも独特な描き方とは言えない。なぜなら、明治 20 年代において、鼻という人間の身体の一部が「文明」と「野蛮」とを区別する手段として頻繁に取り上げられていたからである。たとえば『幼年雑誌』の「鼻と人種」と題する記事には「文明人」と「野蛮人」との差異が鼻を媒介として【図３】のように描出されている。



【図 3】
（「鼻と人種」『幼年雑誌』第 3 巻　第 23 号　明治 26 年 12 月 1 日）の挿絵

滑稽味に溢れているこの挿絵は服装の有無や鼻の高低の差異を視覚的に明瞭にすることで「黒人」が「文明」の光と疎遠している主体として産出されている。『侠黒児』における挿絵はこうした日本の同時代的な視線をそのまま反映していたのである。

3.2　「黒い」肌の持ち主

『侠黒児』における「黒人」という文字には「ニグロ」というルビが振られている。Ｊ・Ｃ・ヘボンの『和英語林集成』（第三版、明治 19 年（1886））には「negro n. Kurombō, kokujin」とあり、さらにこれらに関す

るする項目には、「Kokujin　コクジン　黒人（kuroi hito）n. A black man, negro: ― shu, the black race; the negro」「Kurombō　クロンボ　n (coll.)A black person; negro」と記されている。また大槻文彦の『言海』（明治 22 年（1889））にも「こくーじん　［名］黒人　亜非利加、印度等ノ、色ノ純黒なる人種ノ称、クロンバウ」「くろんーばう　（名）黒坊　［或云、島ノ地名ノ Colombo.ニ起こるカト、或云、錫蘭ノ崑崙奴ノ転ナリト］印度、亜非利加辺ノ、色ノ純黒ナル人ヲ呼ブ語」と解釈されている。

「黒い」肌の持ち主としての「黒人」への眼差しについては、福沢諭吉『世界国尽』（明治 2 年（1869））の「世界人民の事」に、「阿非利加の人種は色黒し」との記述があり、その「凡例」には「此書は世間にある翻訳書の風に異なれども、其実は皆英吉利亞米利加にて開版したる地理書歴史類を取集め、その内より肝要の処だけ通俗に訳したるものにて私の作意は毫も交へず」と明言されており、欧米の文献を参照にしたことが明らかにされている。この点について藤田緑の「探険と殖民―明治期日本におけるアフリカ像-」（『国際文化研究科論集』第 2 号 1994）に「この『世界国尽』は、江戸時代同様、間接情報、欧米のアフリカ観というフィルターを通したアフリカ紹介であることに変わりがない」と指摘されているように、日本に流入された「黒人」のイメージは西洋人の思考を経由して伝達された情報であった。

さらにいえば、西洋人の持つ「黒」に対する考え方には、「一六世紀以前―すなわちイギリスのアフリカとの接触が本格化する前から、「黒」には既に「不潔・不純・陰険・危険・悪意・死・不吉」などのマイナス・イメージが無数に付着していた」[7]。そうした先入観が日本人にそのまま伝わっていたのかどうかについて断言することができないが、「黒い」肌の持ち主としての「黒人」の身体性に対する人種的偏見は、前述の幼年向け雑誌にも散見される。

地球上の住民の数は、凡そ四億万あり、之を分類すれば、五大人種あり、蒙古人種（黄色）、馬来人種（褐色）、高加素人種（白色）、ヱ

ティヲピア人種（黒色）、亜米利加人種（銅色）

（無記名「人文地理」『幼年雑誌』第 3 巻　第 8 号　明治 26 年（1893）4 月 15 日）

此土人は南亜米利加中に於て、最勉強の民と称せられ、白人、黒人、混合人の三種なり、＜中略＞黒き野蛮土人等は、かの汽車なる荷物を運ぶ最終の車に乗り、黒き足をぶらりと下げ、腰以上の短き上着を着し、

（世界巡遊者「野蛮人の奇風」『幼年雑誌』第 3 巻　第 11 号　明治 26 年（1893）6 月 1 日）

「地球上の住民」を「色」によって「差異」化している「人文地理」「野蛮人の奇風」と題するこれらの記事に明らかなように、西洋人による「黒人」へのマイナス的イメージは、日本の子供の世界にもそのまま享受され、彼等を対象にしたメデイアを通して発せられていたのである。

3.3「英人」による「黒人」像

『侠黒児』の挿絵における「黒人」の身体性の差異化は、テクスト中における「英人」の眼差しと連動し反復しながら彼等への差別を生み出している。その意味で、『侠黒児』における「英人」の「黒人」への差別的な認識は原作をそのままなぞっているといってよい。

たとえば植民地の典型的な人物像として提示されている悪玉としてのジェフリィと善玉としてのエドワードという二人の「英人」が「黒人」を見下ろしている様態は、たとえば、原作の「Mr. Jefferies considered the negroes as an inferior species」が『侠黒児』では「じぶりえいは奴隷の黒人を見ることと劣等動物の如く」として、また、原作の「This gentleman treated his slaves with all possible humanity and kindness.」が『侠黒児』では「えどうあゝどは天性至仁にして、不具なる子に親の慈愛の深きがごとく、天賦の権を伸ぶるによし無くして、強者の食となりぬる、箇蒙昧暗愚の民を憐れむ志衆に超えたり。」と表現されている。日本語の文意は英文の翻

訳に近い。

「英人」を濾過装置として提示された「黒人」へのこうした視線は、英文における「they are a race of beings naturally inferior to us」「incapable of gratitude, disposed to treachery, and to be roused from their natural indolence only by force」といった表現を、『侠黒児』は「下等動物」「野蛮」「愚鈍」「畜生」といった言葉に置き換えつつ連動し反復しながら、ステレオタイプ化された「黒人」像を築きあげることで、彼等への差別を再生していく。

「英人」エドワードの「黒人」への眼差しは、彼等を擁護しようとする意思の表明とはいえ、「黒人」を「英人」と異質なる存在として捉え返すことによって形成された同情や憐憫にすぎない。このように錯綜した「英人」の「黒人」への認識の表出は、「黒人」への差別の披瀝とともに「英人」の優位性を強調する効果をもたらしている。

一方、西欧にとっての「他者」としての「黒人」表象を引用する形をとる『侠黒児』における語りの一連の趣は、単に原作の直接的な反映とのみ断定することはできない。たとえば、『侠黒児』の三年前に書かれた矢野龍渓『浮城物語』（明治 23）には、南洋の「蛮人」をめぐる以下のような記述がある。

> 善く〳〵視るに彼等の骨格容貌ハ総て先きにボルネオ島にて出逢ひし蛮人と大同小異にて頬骨露はれ、色黒く筋骨殊に逞しく、腰辺に色布を纏ひし外は身体総て露出せり、皮膚の色は黒光りに光を放ち、顔色卑醜を極む、然れとも其の武器とては先太の棒、古釘、古包丁の類を結付て造り成せし幾條の槍を携ふるのみ、彼の人髪を着けたる太刀をも帯ひす、又た恐ろしき吹筒をも持たさりしかは、先つダイカ種族にはあらしと思ひしかとも、何分ん蒙昧未開と見ゆる蛮人なれは、何時我々を屠殺せんも計り難し、
>
> 両君の頭髪は蓬々として塵芥を戴き皮膚は黒光を放て漆をかけし如く、顔一面に泥と垢とを混し両眼のみ、パチ〳〵と光るところは殆んと啖人（ひとくひ）種に異ならす、

ここには、「皮膚の色は黒光りに光を放ち」「皮膚は黒光を放て漆をかけし如く」とあり、「我々」とは異なる「黒い」肌の持ち主としての身体性の強調によって異質なる「人種」として「蛮人」が浮上し、彼等の異様なる風習を見下ろす視線が引き出されている。しかもこれら「蛮人」の表象が、いずれも、作中に掲げられる「ロベルト氏の風俗志」「バルボサ氏の紀行」など、西欧の先行文献に依拠していることは注目してよい。

「人種」レベルの差別的眼差しは、森鴎外が『人種哲学梗概』(明治 36・6　国語漢文学会講演　明治 36・10 刊) の中で紹介した「GOBINEAU 伯の人種論」などに集約されることになる。そこでは「人種」が「低いものから高いもの」すなわち進化論に基づいて序列化される。

こうした同時代の人種観に基づく「黒人」像と『侠黒児』のそれとを視野に入れたとき、『侠黒児』に描かれる「英人」像や「黒人」像は、一義的に図式化できない、錯綜した意味を帯びているといってよい。

『侠黒児』における「黒人」について、斉藤愛は「異貌の自画像—尾崎紅葉『侠黒児』と Maria　Edgeworth　'The Grateful Negro'」(『比較文学』第 39 巻　1996) の中で、「「日本人」の他者表象の典型的パターンの一つ、他者の「日本人化」を端的に例示するもの」と解釈を施し、『侠黒児』中の「黒人」像に日本人の「自画像」を見出している。しかし、『侠黒児』の「黒人」は自画像としてのみ規定し得ないと同様に、「英人」もまたこれに対置される「他者」としてのみ存在するわけでもない。

このことを考えるためには、作中に描かれた二種類の「黒人」および二種類の「英人」の相互の関係性に注目する必要がある。

3. 4　「奴隷の中に双璧の誉」としての「黒人」像

ともにアフリカの「ころまんちん」から西印度ジャマイカ島へ「奴隷」として「移住」してきた「黒人」である主人公シイザアと「暴動の首領」ヘクトルは、次のように描写されている。

【原作】

They were both of the same nation, both koromantyns. In Africa they had both been accustomed to command; for they had signalized themselves by superior fortitude and courage. They respected each other for excelling in all which they had been taught to consider as virtuous; and with them revenge and virtue!

【侠黒児】

抑も此暴動の頭領は、じふえりいが奴隷なるへくとるといふ黒人にして、しいざあとは故郷を同うし、売られし時、同うし、載まれし船を同うし、今又労役を同うすれば、其交は自から骨肉の親みに超えたり。へくとるは剽悍にして乱を好み、しいざあは深沈にして壮武なり。じゃめいか島に服役せる黒人は此二人を押して畏敬すること、士卒の将を見るがごとし。

【原作】

Hector, when he coolly reflected on what had passed between him and Caeser, could not help admiring the frankness and courage with which he had avowed his change of sentiments. By this avowal Caeser had in fact exposed his own life to the most imminent danger, from the vengeance of the conspirators, who might be tempted to assassinate him who had their lives in his power.

【侠黒児】

我としざあとは、奴隷の中に双璧の誉ありといへども、彼はわれに欠けたる才と徳とを備へて、名望の高きこと我に数倍せり、此度の企に彼一人を泄らしつる、千百人を失へるにも勝りて、味方の英気を挫きたり。

日本語と英語のニュアンスの微妙な相違はあるものの、同じく「暴動の首領」としてのヘクトルとシイザアが対照化されている。「奴隷の中に双璧の誉」としてのシイザアに「才と徳」が兼備されていること、さらに「豪傑」としての側面が擁されていることが例文から窺える。「深沈にして

壮武」的な素質には、「さては全島の黒人の謀を破られて、再び白人の囚虜とならむには、我同胞は如何ならむ。」の如く、「じゃめいか島に服役せる黒人」「我同胞」「士卒」への思いやりも示されており、「黒人」シイザアの英雄的な人格が強調されている。

この「黒人」像は、先述した同時代における日本の「黒人」像とは明確に異なっている。

しかし原作では「白人退治の元師」として登場する「黒人」の魔術師エスサアの「Your heroism is in vain.」といった語りを通して、英雄としての「黒人」像に揺らぎを齎しながら、末尾の「Our readers, we hope, will think that at least one exception may be made, in favour of *THE GRATEFUL NEGRO*.」へと収斂されていくことで、英雄としての「黒人」は最終的に「一つの例外」として回収されてしまう。

一方、『俠黒児』ではこうした言説は存在しない。「賢きしいざあもおびい（魔法）を疑わず」と規定されるものの、「おびい何か有らむ。死亦何か有らむ。」「おびい爾は妖なり、義、我は徳なり。妖何為ぞ徳に勝たむ。」「卑怯なる彼等が所為」というように、「魔術」への批判を込めたシイザアの心内語が配置され、「主人」への「恩返し」を貫こうとする彼の固い意思の表明に書き換えられている。紅葉は自らの信念を貫通しようとする「黒人」の様態を描出することで、英雄としての「一個の俠黒児」を創出しようとしたのである。いいかえれば、原作があくまで人種間の歴史的な葛藤の関係をめぐるドラマであるのに対して、『俠黒児』は、歴史性を剥離させることによって、むしろ、人種を越えた人間の関係をめぐるドラマの中に普遍的な倫理を描き出したといってよい。

『俠黒児』において、人種間の境界を乗り越えた関係は、「恩」によって裏打ちされる。これは、「黒人」シイザアの「英人」エドワードへの「恩返し」を通して物語られていくわけであるが、『俠黒児』の地の文において、原作にはない以下のような昔話が挿入されることによって「恩」への傾斜が補完されている。

果敢き根無草には似たれども、昔さる医師の、山路にて狼に出遭ひけるに、人を噛まむともせで、草叢に臥したるを、熟視(よくみ)れば、口を開きて、呻き苦むは、何をか啖ひけん、吭に骨を立てたりと知りて、難無く抜きて取らせけるに、此狼数日を経て、一口の剣を啣へ来り、恩人の庭に留めて報酬とせしを、後までも狼の剣とて、其家に伝へしとかや。

ここでは、「動物報恩譚」すなわち「狼報恩」[8]という昔話が挿入され、「恩」を「懐ふ」心構えが強調されている。「黒人」の身の上について、「彼等野蛮なり」「人間と生まれながら畜生同様に売買される」「毛唐等に黒人が畜生同然の取扱をされる」といった語りがあり、彼等が「人間」でありつつも「野蛮」「畜生」と同様にされていたことが語られている。しかし、こうした「黒人」への差別的な言説は、「恩を知らなければ畜生だ」といったシイザアの語りによって反転され、こうした差別を払拭しつつ「恩」を貫徹しようとする彼の意思が強調されることになる。

「旦那様」エドワードへの「恩返し」は、『侠黒児』の末尾において、「黒奴」の「暴動の首領」ヘクトルが「英人」エドワードに「斬付け」ようとした「小刀」に刺され「急所の重傷」を負ったシイザアが「纔に舌を動かし」ながら、「旦那様、これが恩返し」と発する言葉によって成し遂げられていたと見てよい。原作のこの箇所は、「重傷」を負ったシイザアが治療を受けて回復し妻クララと再会を果たし、「Caesar's joy! — we must leave that to the imagination.」といった語りを通して、彼の喜びの様子が浮き彫りにされ、幸福な結末として描出されている。

しかし、紅葉はあえて「黒人」シイザアの死を書き込み、「おびあの森に義侠なる夫婦が死生を換へた」といった記述を書き加え、シイザアの悲壮なる死を「義侠」なる行為として位置づけている。*The Grateful Negro* という原作のタイトルを、紅葉は『侠黒児』と置き換えた。原作の題名は謝意を表す「黒人」と訳されるものの、紅葉はあえて『侠黒児』いわば「侠」なる「黒」い「児」の物語としている。シイザアの死は、「主人」エド

ワードに「恩返し」をしようとする彼の願望によるものであり、「義侠」なる行為の結晶である。[9] また、『侠黒児』において、「主人」への「恩返し」を果たそうとするシイザアの志向性は原作と異なる様相を見せている。一つ目として、「黒人」シイザア夫婦が「英人」エドワードに引き取られた際の彼の内面描写が挙げられる。

【原作】

Now my good friend! said he to Caeser.〈中略〉Caeser perfectly understood Mr. Edwards said; but his feelings were at this instant so strong that he could not find expression for his gratitude: he stood like one stupefied! Kindness were new to him; it overpowered his manly heart;〈中略〉Gratitude swelled in his blossom; and he longed to be alone, that might freely yield to his emotions.

【侠黒児】

夫婦の歓喜は幾何ぞや。破鏡せずして、早く再び円なる嬉しさを語合ひ、事あらむ日は命なか〳〵に恩人の為に吝まじものと、心の中に誓ひけり。

原作では「friend」と呼びかけるエドワードを通して「Kindness」「Gratitude」といった感情をシイザアが感じ取ったものの、こうした感情をどのように処理すればいいのか躊躇している様子として描出されている。しかし、『侠黒児』では、「事あらむ日は命なか〳〵に恩人の為に吝まじもの」といった「心の中」の「誓ひ」として書き直されており、原作では「黒人」シイザアの内的葛藤として処理されている箇所が『侠黒児』ではシイザアの堅い意思の表明として仕上げられている。

二つ目として、シイザアの「心の中」の「誓ひ」が、彼の「涙」と拮抗され言語化される点が挙げられる。「彼等野蛮なりといへども、非情の木石に同じからざれば、憂きにも、愁きにも、泣くこと丶てはあらざりし、剛勇不敵のしいざあも、此事を語り出で丶は、常に涙を流しけり。」「小刀

を以て来たらむには、我等或は命を授くべきもおびいは夫婦が骨を斫るべき斧鉞にあらずと、熱き涙を流しけり。」など、「大恩人」という記号に対して感謝や感動の「涙」を流すという態度は、シイザアの「恩」への傾斜を強化し、「恩」を実体化しながら言語化していく。要するに、原作は「Kindness」「Gratitude」といった新しい感情を「黒人」シイザアが学習し習得していく心理過程を描き出しているのに対して、『侠黒児』ではこうしたプロセスより、むしろシイザアの「涙」の反復的な描出によって積極的に「恩人」への「恩返し」として書き換えられているのである。

「恩人」への「恩」を「涙」を媒介として言語化し具現化ようとする「黒人」の様態は、「黒人」の確固たる信念の表明であり、これによって「奴隷の中の双璧としての誉」かつ英雄としての「黒人」の位相が固められていくのである。

『侠黒児』において英雄としての「黒人」像とともに注目されるのは、脇役としての「黒人」の存在である。原作では彼等の存在は完全に排除されているが、『侠黒児』には彼等の「声」が再生されている。「黒人の會て夢想せざりし楽園」としての「えどうあゝどの囿」に関する記述は、「斉しく同郷の黒人に生まれ、斉しく異域の奴隷に売られ」た「黒奴」の境遇が「苦」「憂」「悲」といった「黒人」の感情表現を媒介として、「じふえりいが奴隷は常に隣を羨みぬ」「じふえりいが奴隷の羨みけるも理哉」などと評価されることで、二人の「英人」の「囿」の有様が対照化されている。

また、こうした「黒人」の感情表現を介する彼等の「声」の再生は、「謀反」の気運が高揚される場面にも配置されている。「一人の声の呼はれば、我も死なむと声々」「一人呼べは十人応」える「黒人」の「声々」が、「全島」に「殺気」を「充満」させ「今宵を逸さぬ気色」に発展されるなど、『侠黒児』では「黒人」の苦悩の「声」が「謀」の始発を告げる装置として借用されている。

『侠黒児』における英雄としての「黒人」や「黒人」の感情を代弁して

いる語りは、原作の背後にある「高貴なる野蛮人」や原作における不安定な英雄としての「黒人」像や「蒙昧暗愚の民」と表象される明治時代の日本における「黒人」像と一線を画していたのである。

3.5 「黒人」による「英人」像

『侠黒児』には「黒人」像のみならず、「英人」をめぐる錯綜した語りが配置されている。これは主に「黒人」を媒介として提示されている。シイザアが「黒人」の「謀」を事前に防ぐためにヘクトルの小屋に向かい彼を説得する場面で二人の「英人」に対する認識が以下のように表現されている。

【原作】

'He that is now my benefactor — my friend!'

'Friend! Can you call a white man friend? cried Hector starting up with a look astonishment and indignation.

【侠黒児】

「それは、真箇に慈悲深え、善人だっちゃねえ。我の大恩人だ、人ぢゃねえ、神様だな。

「神様だ？　えゝ、おい、しいざあ、神様とは誰の事だ？　えどうあゝどの事か。　毛唐人のことか。　大概にしておけ。　毛唐等に黒人が畜生同然の取扱をされるのだ。(中略)

「恩を知らなければ畜生だ、我は畜生にはなりたくねえから何処が何処かまで旦那組だ。(中略) 恩はやっぱり恩ぢゃねえか。

命の救済者としてのエドワードに対するシイザアの「my benefactor — my friend」といった原作の言葉が『侠黒児』では「真箇に慈悲深え、善人だっちゃねえ。我の大恩人だ、人ぢゃねえ、神様だな」と書き換えられており、「英人」エドワードが「黒人」シイザアの「benefactor」すなわち「恩人」として産出されているのは同様である。しかしながら、英文では

「benefactor」が「my friend」と想定されているものの、日本語では「恩人」が「善人」「神様」として祭り上げられており、「恩人」に対する「黒人」シイザアの認識の落差が読み取れる。『侠黒児』におけるこうした差異は、「英人」と「黒人」における「主」「奉公」という序列化された主従関係に起因している。

一方、ヘクトルの「Can you call a white man friend ？」という英文の一節は、『侠黒児』では「毛唐等に黒人が畜生同然の取扱をされるのだ」と改められている。英文の「a white man」が、日本語では「毛唐等」という「英人」への批判を込めた語調で表現されている。「毛唐人」としての「英人」は、『侠黒児』の付録として収録されている泉鏡花の『金時計』（明治26年）の中にも「英人」をめぐって「へえあの毛唐人か！」という言葉が書き記されている。つまりここには「神様」としての「英人」と、「毛唐」としての「英人」とが併存し、さらにこれに、「恩」を知る義の人としての「黒人」と、悪玉としての「黒人」とが並置される、という構造がある。ただし、原作が、奴隷制度をめぐる葛藤の構図を批判的に反映しつつ、しかも結果的に「英人」の優位性を保持したのとは異なる関係がそこには託されている。

自国民としての「英人」に対する批判的語りを原作者があえて退けていたとしたら、紅葉はこれを巧みにずらすことによって、「英人」と「黒人」をめぐる両価的価値観を示したと言いかえてもよい。

先の『浮城物語』には、西欧の視線を引用した「蛮人」表象を示しつつ、西欧との対立構図の中で「蛮人」に寄り添う視線が見られる一方、「蛮人」の領土に対する帝国主義的な欲望も露わに示されていた。

翻案である『侠黒児』に原作の構造が反映していることは言うまでもないが、二人の「英人」と二人の「黒人」との錯綜した関係をめぐる原作との差異の中には、西欧世界と非西欧世界の両者に対してつねに両価的な視線を投げかけざるを得ない明治近代の視線が重ねられているとみてよい。だが、『浮城物語』が結果的に西欧の視線と欲望の模倣であったことと比較すれば、『侠黒児』に現れているのは、むしろ、西欧世界の視線の権力

を相対化する構造だったとみることができる。

本国イギリスと「殖民地」ジャマイカ島をめぐる複雑な心理が「黒奴」の暴動を通して人種間の葛藤を物語る原作の枠組みを踏襲しながら錯綜した視線を重層させる『侠黒児』の語りは、一方で「黒人」の身体的表象などに同時代の視線を明らかに反映させながらも、その根底において、明治時代におけるステレオタイプとしての「英人」像や「黒人」像を描く視線とは異なるスタンスをとっていた。

無論そこには、「侠」「徳」「義」といった古風なモチーフの強調が表裏の関係としてあったが、それらを普遍的な倫理とする紅葉の認識は、「英人」と「黒人」をめぐる人種間の歴史的な対立構造を越えた人間関係のドラマという別の文脈にずらす逆説的な視線としても機能していたはずである。

付記

本文の引用は *Popular Tales* (by Maria Edgeworth,London;Simpkin Marshall,1848)、『紅葉全集第四巻』（岩波書店、1993.3）に拠る。字体は新字に改め、ルビは適宜省略した。

注

1 Hoxie Neale Fairchild, *The Noble Savage* (New York) 1961

2 Peter J. Kitson [and] Debbie Lee *Slavery, Abolition, and Emancipation* : writings in the British romantic period /London : Pickering & Chatto 1999

3 森野富「サイード以後のポストコロニアル理論」『ポストコロニアル理論』晃洋書房 2004.6

4 『福沢諭吉著作集 第二巻』慶應義塾大学出版会 2002.3

5 藤田緑「探険と殖民—明治期日本におけるアフリカ像-」『国際文化研究科論集』（東北大学大学院国際文化研究科編集委員会編）第 2 号 1994.12

6 藤田緑「高貴なる野蛮人— 18 世紀英国人の黒人観—」『東北大学教養部紀要』第 58 巻 1992.7

7 正木恒夫 「黒いヒーローの条件と限界」『植民地幻想』1995.7 みすず書房

8　詳細なことについては森田宗男『日本昔話事典』(弘文堂　1977) の「狼報恩」の項を参照されたい。

9　『侠黒児』における「義侠」精神について、土佐亨の「恩義に殉じる仁侠精神の美化」「仁侠道徳や義侠心の鼓吹を主唱した明治少年の読物」(「尾崎紅葉「侠黒児」とエッジワース「恩がえしをした黒人」」『解釈』第 17 巻　1971)、斉藤愛の「死をもって完成される自己犠牲の精神である義侠イデオロギー」(「異貌の自画像—尾崎紅葉『侠黒児』と Maria Edgeworth, 'The Grateful Negro'」『比較文学』第 39 巻 1996) といった指摘があり、「義侠」精神を物語ったテクストとして『侠黒児』が評されている。無論、死と「義侠」精神をペアにしている考え方も一つの見解として認めるべきであるが、論者は、『侠黒児』には「恩」への傾斜という要素が書き加えられている立場で考察している点を付言しておきたい。